

タイトル

著者 1[†] 著者 2^{†,††}

[†] 所属 1 ^{††} 所属 2

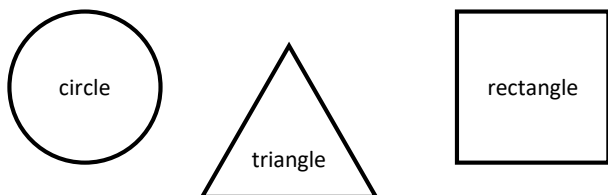


図 1 図の例

1 出力例

本章では、章節項や図表、アルゴリズムの出力例を示す。

1.1 節

節の出力例。

1.1.1 項

項の出力例。

■見出し付きパラグラフ パラグラフの出力例。

1.2 図の出力例

図の出力例を図 1 に示す。

以下、図を使用する際の注意点を列挙する。

■PDF ファイルの使用 以前は論文を DVI ファイルで提出するのが主流だったため図も EPS ファイルで作成していたが、現代ではほぼ間違いなく PDF ファイルの提出を求められる。したがって、PowerPoint などで作成した図を直接 PDF ファイルとして保存し、挿入すればよい。

■グレースケールでの表示確認 PDF ファイルでの提出が主流となったため、基本的に図で色を用いても問題ない。しかし、印刷時に読み手が必ずしもカラー印刷するとは限らないのに加え、人によっては色盲により書き手が色に込めた意図を汲み取れない可能性もある。そのため、図は始めからグレースケールで作成するか、グレースケールで印刷されても十分に伝わるよう作るべきである。

■文字の大きさ 図を挿入する際にスケールや横幅を操作したために、図中の文字が小さくなってしまいうケースはよくある。これを防ぐには、初めから論文の大きさに合わせて図を作ってしまうのが簡単である。基本的に A4 二段組の文章であれば横幅 8cm 文字サイズ 8–9pt くらいで作成すればおおよそちょうどよい大きさになる。

1.3 表の出力例

表 1 に表の出力例を示す。

表 1 表の例 (booktabs.sty 使用)

(1:1)	(1:2–3)	
(2–3:1)	(2:2)	(2:3)
	(3:2)	(3:3)

Input: $I = \{1, 2, 3, 5, 7, 11\}$ // 特に意味のない素数

Output: sum

```
1 sum = 0
2 foreach i ∈ I do           // 特に意味のない for ループ
3   | sum = sum+ fibonacci(i)
4
5 Function fibonacci(n)      // フィボナッチ数列
6   | if n = 0 then
7   |   | return 0
8   | else if n = 1 then
9   |   | return 1
10  | else
10  |   | return fibonacci(n-2) + fibonacci(n-1)
```

図 2 アルゴリズムの出力例

表に関しては、booktabs.sty の使用を勧める。基本的に表は罫線を少なくする方が見やすいが、 \LaTeX 2_ε 標準の表では列の境目を縦の罫線で表すしかない。一方で、booktabs.sty は列の境目を横罫線の切れ目として表せる。また、表の上下で使う罫線を太く、中で使う罫線を細くすることでよりすっきりとした表が作れる。詳しい使い方については、複数列・複数行に渡るセルの書き方とあわせて表 1 で使用しているため、ソースファイルを参照してほしい。

1.4 定義環境などの出力例

定義、定理、補題、証明、および例については ‘my_command_definitions.sty’ 内で環境を定義してある。なお、一部のフォーマットで環境の終了位置が曖昧となる場合は適宜 \END コマンドで各環境の終了位置を明示する。

定義 1. 定義の例. ■

定理 1. 定理の例. ■

補題 1. 補題の例. ■

証明. 証明の例. □

例 1. 例の例. ■

1.5 アルゴリズムの出力例

アルゴリズムの例を図 2 に示す。

Title in English

First Author[†] and Second Author^{†,††}

[†]First Affiliation

^{††}Second Affiliation

アルゴリズムに関しては、`algorithm2e.sty` の使用を（個人的に）勧める。調べると `algorithmicx.sty` などの情報がよく出てくるが、`algorithm2e.sty` の方がすっきりとして見やすいアルゴリズムを書けると感じる。記法にはやや癖があるものの、基本的な書き方は図 2 のソースのとおりであるため、アルゴリズムを書く必要がある際は候補に考えてほしい。また、公式のドキュメントもしっかりと書かれているため、分からない点があれば参照するとよい。

1.6 参考文献の出力例

参考文献を参照した際の例 [1–3]。 `cite.sty` を使用しているため、参考文献上で連続する参照は連番として表示される。

$\text{\LaTeX 2}_{\epsilon}$ で参考文献を列挙する際は BibTeX の使用を勧める。あらかじめ参考文献を列挙した `.bib` 拡張子のファイルを用意し $\text{\LaTeX 2}_{\epsilon}$ ソース内でインポートすることで、コンパイル時に自動的に参照の解決が行われる。

参考文献

- [1] E. F. Codd, *A Relational Model of Data for Large Shared Data Banks*, pp. 263–294. Berlin, Heidelberg: Springer Berlin Heidelberg, 2002.
- [2] R. Bayer and E. McCreight, *Organization and Maintenance of Large Ordered Indexes*, pp. 245–262. Berlin, Heidelberg: Springer Berlin Heidelberg, 2002.
- [3] R. Bayer, *B-Trees and Databases, Past and Future*, pp. 232–244. Berlin, Heidelberg: Springer Berlin Heidelberg, 2002.